

翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』(十二)



図版1 五編下原裏表紙(色刷)、六編上原表紙(色刷)

凡例

一、「翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』(十)」(『京都光華女子大学研究紀要』第四十八号、平成二十二年十二月)の後を承けて、京都光華女子大学図書館蔵『雪梅芳譚犬の草紙』の「六編上」を、図版を掲げつつ翻刻する。合巻『雪梅芳譚犬の草紙』については、「初編上」の翻刻を掲載した『光華日本文学』第十二号の「凡例」を参照いただきたい。

一、翻刻の方針のみあらためて掲出する。

1、図版は各丁見開きを一面とし、丁付けにより「一ウ、二オ」のように示す。

2、本文翻刻は、やはり「一ウ―二オ」のように冠し、改行位置は/で示し、丁移りは「」で示すが、書入れについては丁付けにこだわらない。

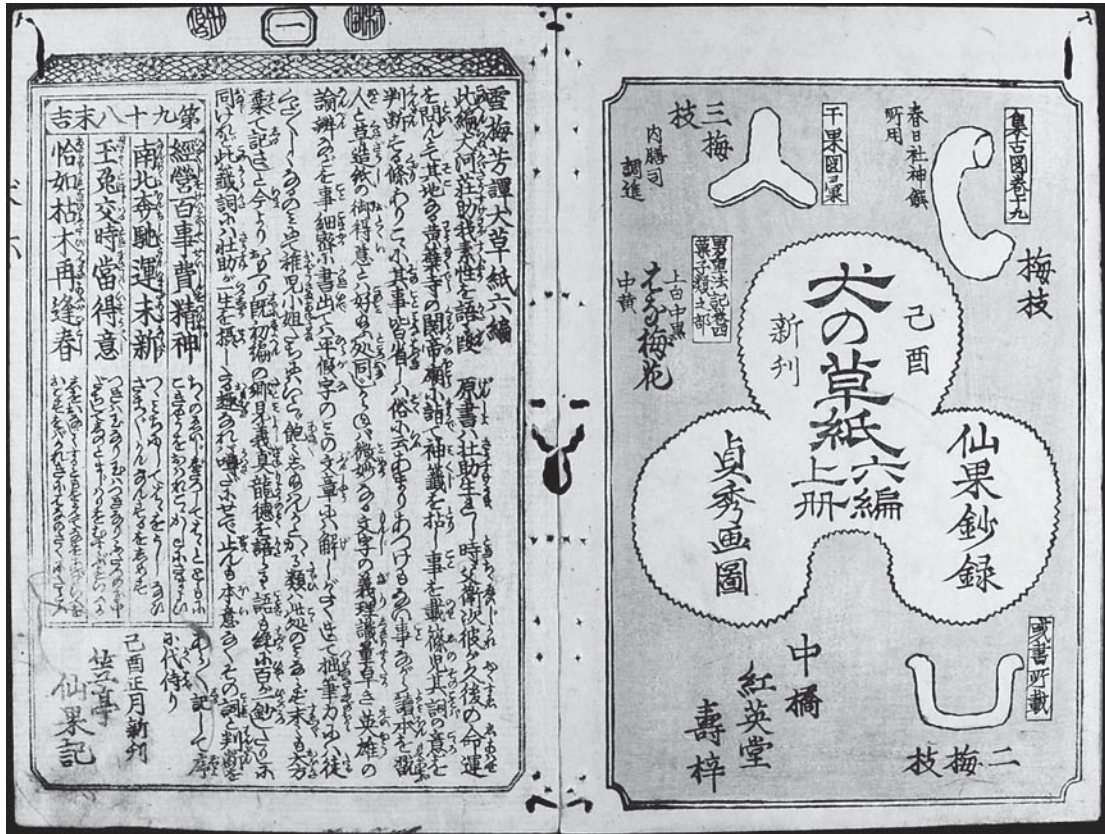
3、一面が二枚の絵組から成る場合、翻刻の方のみ半丁ごとに分離する。

4、原文はできる限りそのままとするが、漢字仮名とも、異体字、略体字は現行のものに改めた。

5、読みやすくするため、句読点を補い(ただし、序文の句点は原文のままとし、その旨を断わった)、会話文については「」を、会話中の会話文には「」を補った。原文にある「は」に改めた(原文の「あるいは」は、「とした」。さらに仮名を適宜、漢字に置き換え、その場合もとの仮名をルビに移した)。

6、原文の振り仮名は、右と区別するために()に入れた。ただし、袋・表紙および序文等、一部原文のままの振り仮名に()をつけなかったところがある。その場合は、その旨を断わった。

肥田 嘉子
隅田 三鈴
高森 松子



図版2 原表紙見返し (色刷)、一オ

7、書入れは本文のあとへ一段下げて、文意の通り易い順に記した。
 8、本文中にある読み進めるための合印については、すべて●で統一した。

9、「初編下」に至って出てきた、本文中の○(段落を改める意識で使用されている模様)は、その位置にそのまま翻刻した。

一、末尾に、前号までに做って、「六編上」に出るもののみながら、登場人物名(まれに地名もある)と、元の読本『南総里見八犬伝』の相当する名称との対照表を付した。

〔原表紙〕

笠亭仙果鈔録

應需／付題 豊國畫

己酉／新刻

六編上

〔原表紙見返し〕

犬の草紙 六編／上冊

己酉／新刊

仙果鈔録／貞秀画圖

集古図巻十九

梅枝

春日社神饌／所用

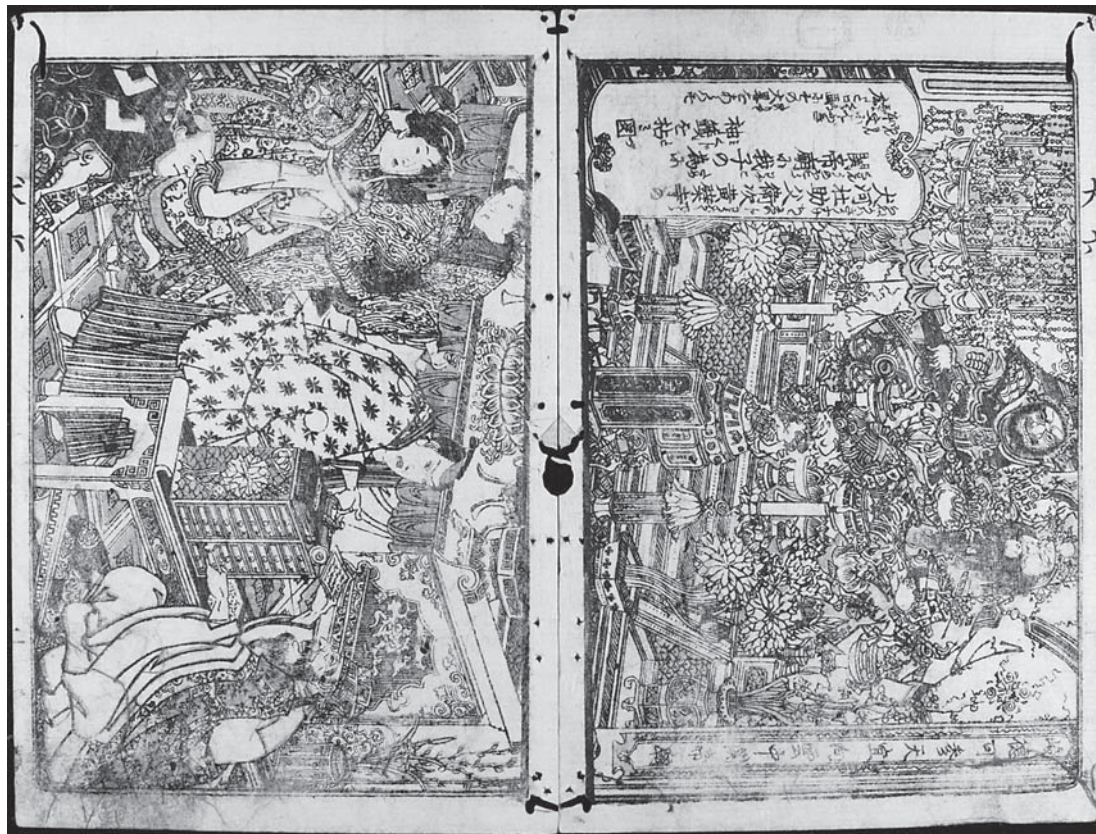
干果図彙

三梅／枝

内膳司／調進

男重法記巻四／菓子類之部

はな梅花



図版3 一ウ、二オ

上白中黒／中黄

或書所載

二／梅／枝

中橋／紅英堂／壽梓

〔一オ〕

(振り仮名は原文のまま)

一

雪梅芳譚犬草紙六編

此編大河庄助我素性を語る段 原書は壮助生れし時、父衛次彼が久後の命運を問んとて其地なる黄葉亭の関帝廟に詣て神籤を拈し事を載、篠兎其詞の意を判断する條あり。こゝに其事皆省しは俗に云、あまりあつけない事ながら讀本を配／人と草造紙の御得意とは好給ふ処同じからねば、微妙なる文字の義理、識量卓き英雄の論辨などを事細密に書出ては平假字のみの文章には解しがたく、まして拙筆力には徒々／＼しくなるのみにて、稚児小姐たちにはいと飽々し給はんかと、かゝる類は此処のみならず、末々も大方／棄て記さじと今よりおもへり。既初編の郷見義真龍 徳を語る、語も纒に百が一鈔したりしに／同けれど、此籤詞には壮助が一生を撰したる趣なれば噂だにせで止んも本意なく、その詞と判断を／あら／＼記して序／に代侍り。

己酉正月新刊

笠亭／仙果記

第／九／十／八／末／吉

經營百事費精神 こそやうをおはれこゝ、かしこにさままひ

南北奔馳 運未新 さま／＼かんなんするをしめす



図版4 二ウ、三オ

玉兔交時當得意 だちしてしとまじはりをむすぶをいふか

恰如枯木再逢春 おおすをばかれきにはなのさくにたど

〔二ウー一オ〕

(振り仮名は原文のまま)

大河壯助父衛次黄檗寺の 関帝廟に我子の為に 神籤を拈る図
 本文にはぶき／序と口画にその大略をあらはす

峻徳可参天宜向雲中関帝廟

〔二ウー三オ〕

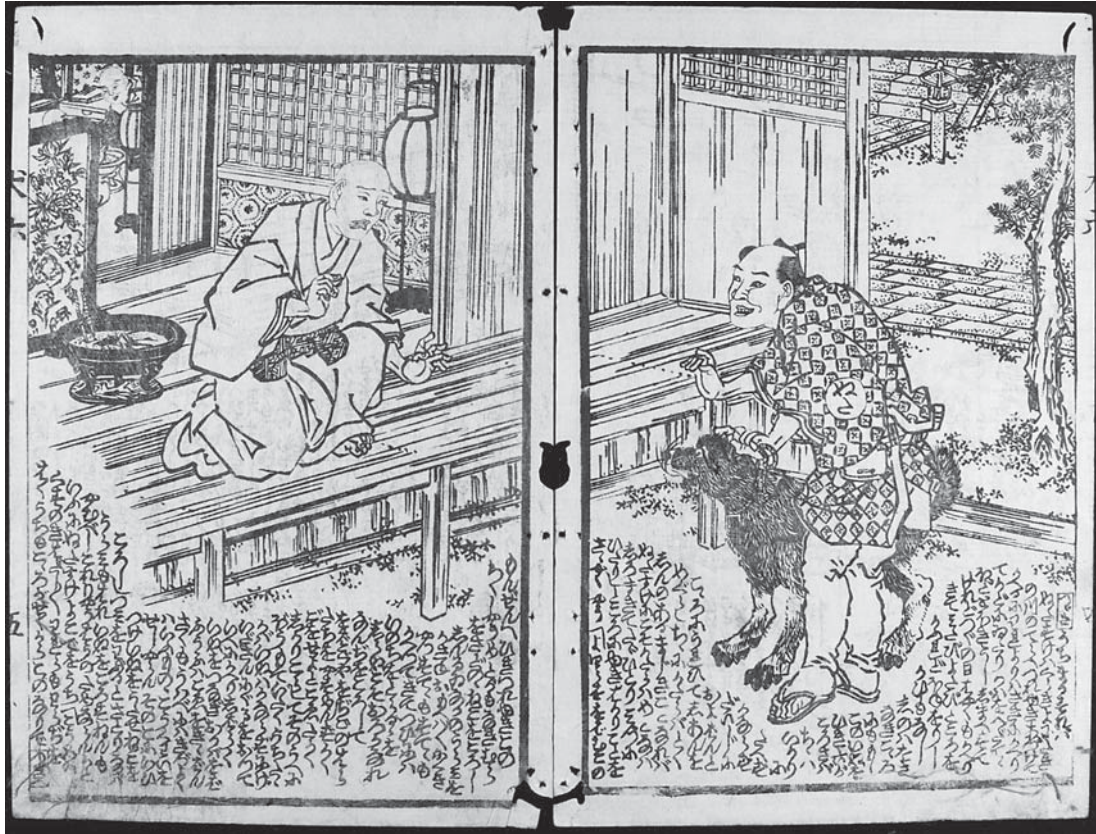
第五編目二十丁裏の絵解きより 大須賀非義六が飼ひ猫き次郎は、犬須賀警作が家なるよ四郎／犬に追ひ詰められ、前は川にて逃ぐるに道なく慌て横切り引つ返すを、よ四郎ははや跳びかゝり、うな／じにくわつと咬み付けば、猫は敢へなく死、てけり。初めき次郎／友猫と争ひし時よりして、瓶ぎ、は危ふく思ひ、下男を二人沼田助と／警作が背戸に遣はし、その様子／を見せたりしに、斯様の仕儀に及／びしかば驚き騒ぎ、沼田助も「捨て置かれず」と共に立ち／出で跡を追へども、棒／だに持たねば「あなや」と叫ぶのみ。石土塊を／投げ打てども、よ四郎は些、か恐れず。兎角する／ほど何処へか駆け行きて見えすなりぬ。この由聞くより非義六は、寄り棒／引つ提げ岳藏ごとと十三なる丁稚を連れ、駆け／来れどもその甲斐なければ、猫の死骸に取り付きて泣き悲しみつ、下男を叱り、棒以て大地を突き／鳴らし、「警作の片端者、常々我に無礼なれば」飼ひ犬さへも見るを見真似に大事の猫を咬み殺し、あくまで我を侮れり。この場を去らず仇を取ら／ねば、我が鬱憤は晴れ難し。汝等は沼田助諸共／片端めが所に行き、あの畜生を引き摺り来れ。口上は斯様／に言ふべし」と教へて遣はし、岳藏に／猫を抱かせ、くどくど咳き家に帰りぬ。今この／辺りの橋の名に猫また橋と呼びなすあり。このき次郎がことにより、名付け／初めしか如何あらん。○件の僕は沼田助共に



図版5 三ウ、四オ

磐作が家に至り、今日の始末をまづ語りて『非義六年頃、数多の犬、飼ふ度毎に此処の犬に傷つけられ、食ひ殺されしは幾らとも限り、なけれど、大人げなき様、なれば一度も恨みも述べず。遂には互ひに争ひを引き出たさんかと、今にては此の方は犬を飼はず。近頃、子供の欲しがるま、に猫を飼へば、また猫も犬のために命を失ふ。犬と犬とは是非もなし。犬を見れば身を締め、近くもえ寄りぬ猫を咬みしは、余りに憎き犬の仕業。今は堪忍なし難し。件の犬を申し受け、猫の仇を報いんとす。事の始めは、沼田助の屋根にての事なれば、証人のため同道したり。疾く犬を渡し給へ。主人の口上斯くの如し』ト言ふ。隣から沼田助は困りきつたる顔色にて、『兎角村には事勿れ、難しい返答せずと僕も難儀をせぬやうに、こと穏やかな取め様頼み申すと怖づく言へば、磐作は打ち笑ひ、『何のこれしき心配御無用。其処許に難儀はかけぬ。さて非義六の申分道理には聞こえながら●』●人間の道を以て、畜生は論じ難し。鼠は猫の食となり、猫は犬に勝ち難し。犬もまた狼には面を向くことも能はず。弱きは強きに制せられ、小は犬に服せらる。これ畜生の定まりなり。犬を猫の仇とせば、猫はねずみの仇とすべし。人にこそ下手人を捕る法あれど、けだものに仇討ち死ざいの掟は聞かず。猫は座敷に飼はる、獸。畳の上に居るべき猫の、その所を去り地上に、駆けり、敵し難き犬のために咬み殺されしは自業自得。犬はまた飼はれても門、また庭に住むものなり。その位を守らずして、床の上に入るを見なば、誰かこれを許すべき。我が犬、其方の屋敷に至り座敷に上がらば、打たれうと殺されうと恨みはなし。猫のために、我が飼ひ犬決して送り遣はずまい。その通り申されよ』ト言ひ放されて、言句も出ず。下男等は尻込みし、沼田助共に、出で去りつ。磐作が答への趣、非義六に、物語れば、瓶、ぎ、夫の言葉も待たず、『憎くしい、弟の言ひ分。理を非に、枉げての、我が儘を、言ふ口で、断りを言ふても、どれほど恥になる。姉を姉とも思はぬ片端め。』

つぎへ



図版6 四ウ、五オ

〔三ウー四オ〕

つゞきそれでよいでは済まされぬ。も一度行つてその犬を引つ縛つて連れ来て。あら手緩し」と息巻けば、非義六「暫し」と押し止め、「甞りでも武芸の達人。猫一匹で騒動を起こさば、村の束ねもする我が落ち度にもならば由なし。今熟くと思案をするに、かの犬も我が屋敷へ入らば、打つともまた殺すとも言ひ分なしと彼奴が一言。さらば犬を謀り寄せ、家の内へ騙して引き入れ、竹槍にて突き殺さん。皆その用意をせよかし」ト我賢げに言ひ論せば、瓶ぎ、も怒りを止め「今、で其処に居た沼田助、何処へ行つたか。竹槍の謀は聞きざりしが、警作とは親しき仲。謀を洩らさねばよいが」と其処此処打ち見れば、非義六も心づき「岳藏、早く沼田助を尋ねて来い。口止めせん」ト急がし遣れば、岳藏は「畏まつた」ト出で行きしが、岳藏は幼けれども知恵才覚大人も及ばず。志ある者なれば主/人夫婦のあるまじき行ひを常に疎み、片腹痛く思ふものから上辺にはさる顔もせず、今日の始末も「あらつたなや、●●●あら由なや」／とは思ひながらも、非義六が言葉に從ひ出で行きしが、程なく帰り「沼田助は宿に居らず。あの男は去年の冬、年貢の未進もあるといふこと。●●●如何して旦那を敵に持ち、その身の災ひ招きませう。捨て置いたとて喋りはせまいと、まづ帰つて参りました。猶先ぐも尋ねませうか」ト真しやかに言ひければ、非義六少し心も鎮まり「成程、言へばそんなもの。もし洩らすとも用心して捕らへられうかと警作が繋ぎて外へ出さずもあれ、犬までも甞りにあらず。その内必ず外へ出づべし。そのときは抜かるな」ト下男によく言ひつけ、その手配りをぞしたりける。沼田助は非義六が目論見を警作に告げ知らせ、さて言ふやう、「あれほどに執心深く恨んでゐさしやるよ四郎犬、飼つておいたら何処ぞでは大騒動の起こるは定。義絶の仲ても血筋の姉弟、からかふばかりが見目でもない。あの犬暫く何処へなりと遣らつしやつたら村長/殿、腹立ちも自然と薄らぎ、何方にも引けを取らず自然と事が収まらう」ト言ふに、警作争はず「よく気をつけて下されし。忝／なし」ト



図版7 五ウ、六オ

一礼述べ、
 『実に畜生の浅ましき、もし欺かされて非義六が屋敷へ行つて殺されなば、それこそいみじき恥辱ならん。成程外へ遣りませう』ト沼田助に「つきへ」

〔四ウー五オ〕

つき打ち任せれば、沼田助は暗き夜に滝の川の寺へ連れ行き、預けて帰るに我よりは先に帰りて門に居たり。川を隔て、程遠き牛嶋へ捨てけれど、次の日早くも帰り来て、三度四度所を変ふれど、骨折りし甲斐もなし。篠兎はをさなき心にも「もしこの犬を非義六が殺さば、父は怒りに堪へず、必ず大事に及ばん」と心に憂ひて思案を巡らし、「父に語らば得心のあるまじきことなれば、沼田助にこそ語らば」と、苗代蒔きた一人水に浸りしところに行き、謀を囁くやう、「よ四郎を伯母婿の門前へ引き連れ行き、この畜生め。咎もなき村長殿、猫を殺し親類仲の恨みを重ね、思へば憎き奴。捨て、も捨て、も帰つて来て、遂には命を取らる、を知らぬこそ愚かなれ。汝を殺して伯母御や伯父御の腹立ちを休めんず。覚悟をせよ」と声高く叱り懲らして、その上に棒以て甚く打ち叩かば、犬は必ず逃げ出ださん。逃ぐるを追つて家に帰り、暫く犬を繋ぎ置かば、伯母夫婦は声を聞、「譬作も上辺には気強くは言ふもの、後悔をせしやらん。その子に言ひつけ犬を打たせ、猫を殺しし罪を詫ぶる」と悟りなば、恨みも晴れ犬を殺す念も止むべし。これ兩方の為ならんか」と言ふに、沼田助横手を打ち「孔明／桶裸足。我等も草鞋を履くうちも心が急ぐからこの態でつきへ」

〔五ウー六オ〕

つき「一緒に行つて助けませう」ト泥より足をすばんと抜き、忙はしく連れ立ち帰り篠兎はよ四郎誘ひて、沼田助共に非義六が門に行きて声張り上げ、しかくと責め罵り頻りに打てば、よ四郎は常に甚くは叱りもせぬ二人が手荒き打擲に、一人驚き逃げ行かぬ道を失ひ、慌て惑ひ元の方へは逃げもせで、非義六が屋敷を巡り背戸の方へ駆け行くに、



図版8 六ウ、七オ

此処は一方口にして外へ逃れん／様もなく、二人もはつと驚きて此方へ逃げ／よと言はぬばかりに道を開きて、上辺には猶／棒振り上げ、騒ぎ立つに犬はいよ／狼狽へて遂に垣根の内に馳せ入り、猶左手なる小座し／きへ驀地に躍り入りぬ。「すはや」と非義六／僕を下知し、出口／の戸を閉めさせ響めく／声の大方ならぬに、沼田助は呆れ果て「此処に／うかく居るならば、如何なる難に遭ふかも知れず。疾く／逃げ給へ。我も逃げん。まづこの棒を隠さん」と、／懐に押し入れて駆け出せば、顎に支へ足に絡まり金玉を押し潰して俯しに躓き／倒れ、「ああ痛や、痛や／」と起きんとしてはまたも／棒に絡まり倒れ、辛くして棒練り出だし／漸く立てば膝腹は擦り破れ、鼻血は流る、／面打ち響めて跛引き／、篠兎にも構はず／逃げ失せぬ。／○篠兎はさばかり打ちも騒がず、／「毛を吹きて疵を求め、よからぬ／ことをしてけり」と吐息継ぎ／頻りに悔やみ、隙もあらば／よ四郎を救ひ出さんと此処彼処「打ち巡れども、口あるところは残りなく固く閉ざせば／何処よりかは逃げ出づ／べき。犬の苦しみ／叫ぶ声、耳を／貫き●●聞こゆる／のみ。／いと痛ましく／思ひ嘆き、／力なく／家に／帰り／包む／に／由／なく、／しか／ぐと／父に／語れば／●

二

●磐作はさまで怒れる／気色はなく、『犬を追ひ入れ／殺させしは過ちながら、猶／悪しからず。犬もし彼等に／欺かれ引き入れられて害／せられれば、如何に悔しくありなまし。／惜しむとも今は詮なし。猶風聞を／聞、定めよ』ト言ふ時、犬は血潮に染み、踰躍めき／つきへ

〔六ウー七オ〕

つき 馳せ帰り、庭口に入ると斉しくはつたと転けて動きもえせず。／磐作は柱に縋り伸び上がりて篤と見、『数多の槍傷／受けながら帰りしは実に逸物なり。されどもとても助かり難し。／日陰へ入れよ』と言ひければ、篠兎は／聴て縁側近く藁薦／敷きて／其処に／臥させ、／我があや／まぢを



図版9 七ウ、八オ

／ねん／ごろに／語り／聞かせて／水を／与へ／くす／りを／傷に／振り
 かけて／心の限り／労り居たり。○されば前に／非義六は大／勢の下
 男に／下知して犬を／八重に取り巻き、竹槍以て／突き立てしに、傷は
 負ひながら／勢ひは／ます／鋭く、人中を／駆け抜けて／板
 の腰／突き破りて逃げ出で／ければ、「やれ逃すな、はや／仕留めよ」と各
 跡を／追ひかけしが、さのみやはとて／追ひ留めず、道より取つて／返
 しけり。非義六僕等呼び寄せて、『今日の働き抜群なり。即座には／死な
 ざれど、あの深傷にては道にて倒れん。／あら心地よや』ト縁側に腰打ち掛
 ければ、／瓶ざ、は煽ぎ立て／『今日は如何なる／吉日ぞや。き次が仇
 を討つたるは、／あら喜ばし。皆の者、大儀／』と酒飲ませ、肴食は
 せて勞ひけり。／斯くて非義六、瓶ざ、を奥へ呼び寄せ／囁きけるは、
 『犬の背戸より入つたるは、／篠兎沼田助が業にして、「しか／』と言ひ
 罵り、彼等より追ひ入れしなり。／よく／思ふに警作は、表には／強げ
 に見すれど、とても争ひ難きを／悟り、その子に言ひつけ此方の家へ●』
 ●犬を／送り入れしなり。／この勢ひを／抜かず／して、／上手く／た
 ば／かり、●村雨の／御太刀も我が手に／入れんと思ふ。はかり／こと
 は斯様／』と／囁き示して猶言ふやう、「今／我／が昔の主人／成氏
 殿は、鎌倉の両／管領と不和／になり、下総の／許我に落ち行き／籠城
 の後、合戦／止まず。されば／事無く／村長を／我は務めて／ゐるも
 の、両／管領へ／並／ならぬ／志を／躰さずは、／身の上／心
 許／なく／●●覚ゆ。／かのむら／さめの／一腰を／だに鎌倉へ／奉
 らば、／我を●●疑ひ給ふことなく恩／賞も格別ならんとつぎへ

〔七ウー八オ〕

つぎ思へば、いろ／＼手を尽くせど／今日まで望みを遂げざりしが、
 時至つて猫の仇返すに／つれてこの計略／浮かみ／出でしは、家の繁盛／万
 歳と護り／給ふ神の恵みか、／有難や。まづ沼田／助から拵へん』と
 言へば瓶ざ、雀躍りし、／『二丁にも足らぬ道、／なんほ足が適はぬとて、
 今に一度も足踏み／せず、姉を姉とも思／はぬ警作。腹存分に／脂を取
 り謝らせて／やりますせう。あら嬉し／や』と立ち出で、沼田助を／呼びに



図版 10 八ウ、九オ

遣りぬ。○沼田助は愠ひなる／ことをし出だし災ひの／身にも及ばんこ
 とを恐れ／「村長より人來らば／留守と言へ」とて戸棚に隠れ、／息を殺し
 て居たりけるが、／果たして僕等入り来り／「お家方の急の御用、沼田
 助／殿に今来いと／火のつく様に」忙しい言ひつけ。／早く／と急がせ
 ば、／「何処かへ参つて居ませぬ」と／一度二度は偽りしが、／使ひは櫛
 の齒を引く／如く、遂には沼田助／隠れも敢へず／女房に●●／さへも
 叱られて、／漸く／戸棚を／這ひ出で、／洪く僕に／引き摺られ、
 非義六が家に／至り、小座敷に／押し据ゑられ、更に／生きたる心地もせ
 ず、／「首の座に直る時はこんなものか」と／口の内に念仏申て居たりけり。
 時に瓶ざ、出で来り、和やかに／身近く呼び寄せ、暑寒さの●●／挨
 拶も／猫撫で声の／柔らかなる／に、沼田助／少し／心落ち着き、藍
 より／青く見えし顔、浅葱／ほどに薄らぎぬ。瓶ざ、は／膝擦り寄せ「言は
 ずとも／承知であらう。何故／子供と連れになり、山犬を／屋敷へ／追ひ
 入れ／人咬ま／せうとは／せられし／ぞ。●●ひよんなことして命にも
 身上にもかゝる大事。我人の為／大きな災難し出されしこそ、苦く／し
 けれ」ト破れし書付目先へ突き／付け、『鎌倉殿許我の城をお攻め／なさ
 る、その兵糧お取り立ての／これが御教書。最前飛脚が／持参され、
 此方の人は座敷に入つて／拜見なされた折も折、畜生が／跳び込んで四足
 に掛けてこの通り。』
 つぎへ

〔八ウー九オ〕

つぎ御教書を破つたる答は謀反も同じ／こと。獸は弁へなく／
 世の道／理も知らずと●●いへども、それを／飼ひおく主の身は答
 を／逃る、由はなし。殊更●●犬を追ひ入れた／其方と篠兎への／お答
 めは、とれ程か。／それは知らず、よも／安穩にはして居ら／れじ。製作と
 は／不和の仲。子に言ひつけて／此のこことさせうとも、／其方はまた何意趣
 ／あつてその身の破滅も／構はず、我等に／難儀をかける。憎い／人ぞ」ト
 恨まれて、この／有様に沼田助が／浅葱は再／ひ藍に／返り、また紺青ほど
 ／青くなり、唇の／色さへ変はり、冷や汗／流し齒の根も合はず、／震い
 手／手を合はせ『犬追ひ入れしも、旦那に／対し悪かれとの仕業／ならぬ



図版 11 九ウ、十オ

ど、言ひ訳しても役に立、ず。たゞ御慈悲に、私ばかりはせめて命のあるやうにお取り成し頼みます。御慈悲と泣き出だす。瓶ぎ、は吐息を継ぎ「筋を立てれば邪見に当たり、情けをかければ道理に外れ、人の」頭に立つ役目ほど迷惑なものはない。磐作親子、其方も一つに括し上げて鎌倉へ牽くより他はなければ、物言うたことはなくとも篠兎は我が甥。憎れど磐作は血筋の弟。不和の仲とてさいはひに難儀をかけて心地よいと如何してこれが思はれう。気の毒さが山くで、「直く様この由注進する」と此方の人が出かけさつしやる、袖に絶つてやつとのことで今日一日の日延べを頼み、さてその罪の詫びの種拵へる相談に呼びに遣つた志。よつほど礼を受けねばならぬ。さていろくと思案をするに、磐作が大事がる村雨丸といふ太刀は、持氏様の御形見。春王様へ御譲りなされた源氏の家の宝物。管領家にもよく御存知。方々御所望なされる、御様子。あの御太刀を鎌倉へ進上してお詫びをしたら、屹度お許しありさうに、ふと思ひ寄つたれど、それを取り次ぎ都合よく取り成すは、夫の働。磐作も我を折つて、手を下げて頼まにや出来ぬ。片時も早く太刀を持つて詫びして、此方へ来るやうに磐作に言ひ聞かせ、其方も咎を逃る、が良いやうに思はる。猶磐作が片意地をつぎへ

〔九ウー十オ〕

つゞき張つて居れば是非もなし。其方も一つに三寸繩。思ひなしか、どうやら首が細いやうに思はれる」と真しやかに欺けば、『彘、首くと仰る度、喉が詰まつて、身柱元が冷たいやうでこそばゆい。まあ何にせう、有り難い。親は泣き寄り、年頃は仲の悪いお姉弟でも、この場に至ればこの分別。よう聞かせて下さりしました。なんほ気強い磐作殿でもこれ聞かれたら吃驚の上に、ぐにやりとなられませう。縦し手強くともこの沼田助、富楼那の弁舌淀みなく立て板に水を流す、それほどには参らずとも横雁木に牡丹餅を転がすほどは説きつけませう。●善は急げちや。まっお暇。』抜からぬやうに些とも早く、手遅れしては後の祭り。『そこに如才は御座りませぬ』唐紙逆手につたひ

本實母散 中橋 南馬町丁目東側 千葉堂孝輔製

御免 痲瘡湯 せんきりの妙茶

御用藥所 信州上田東山堂製

せんきりの妙茶 一包 八折 一包 八折

仙果録 貞秀画圖



大日本國郡縣地圖 大奉書 六枚綴 府郷御江戸繪圖 同封 六枚綴

徳村の茶 取次所 地本葛紙問屋 江戸南傳所 二丁目 葛屋吉藏

図版 12 十ウ、原裏表紙見返し

し、敷居外れて倒る、をも構はず／外面へ駆け行きぬ。立ち聞く非義六、唐／紙を直す瓶ぎ、顔見合はせにつこと／笑ふ。此方の一間、茶を挽きかけて／居眠りし岳藏が、ふと目を開きて挽き／出す音に驚く兩人、奥と／勝手／別れけり。○沼田助は息も／継がず磐作が／家に行き、始め／終はり／物／語り、●●「思ふたとは格別に／情け深いお上様。／あの人がないならば、今／頃は三人が三寸縄で／惨めな様。俄に／折れるは口惜し／からうが、長殿に●●手を下げるは地下の／者、当たり前。／姉を立てるは順の／道、些とも恥に／なるにあらず。宝は／身の差し合はせ。／可愛い子や／儂が命／救ふ為ぞと、／太刀とやら／渡して／詫びして／下され」ト／手を合はせ、／言葉を／尽くし／口説けど、／磐作／些とも／騒がず、／驚きは／尤も／なれど、／その御教／書は

〔十ウ〕

つゞき 何と書いてどんな判が捺してあつた。大方よくは／見さつしやるまい」『さアそれは、もので御座る。御存知の／無筆の我等、怖さに遠くで見ればかり』『さうで／御座らう。年久しく仇敵と憎みし姉が、／今俄にさほどまで我／を庇ひくれるも／合点がゆかず。太刀を出ださばその罪をお許しあるとは／畢竟、上を下より謀る姉が才覚。許さる、／ものならば、鎌倉へ牽かれて後太刀参らせんも／遅からじ。其処許へは気の毒ながら、子の可愛さに取り／乱し、不覚を取つては武士の名折れ。折角の／親切ながら、まア打ち捨て、置き申さん』ト聞いて／沼田助畳を叩き、『さ、それが片意地と／いふもの。一腰の太刀を出し、二人／三人の命に替へる。これほど／易いことはなし。武士たる／者が後ろ手に縛／られては、それこそ恥。／後助かつても家の／疵。是非承知して／貰はねば痺りも切れて／痛けれど、この場が如何して立、／れうぞ。これ、手を合はせて頼んでゐる。／慈悲ぢや、情けぢや、磐作様／様くく』と掻き口説かれ『浅はかな／非義六の尻にか、つて其方の愁傷。／訳を言つても取り逆上せて御座れば／直には分かるまい。某もよく／考へ、今宵の内に返答せん。気を鎮めて

三の巻へ



図版 13 六編上原裏表紙 (色刷)、六編下原表紙 (色刷)

仙／果／鈔／録 貞／秀／画／圖

〔原裏表紙見返し〕

家^本實母散 さんぜんさんご／婦人ちのみち／一切の妙やく

中橋／南傳馬町一丁目東側千葉堂孝輔製

私方実母さんの義 中ばし南でんま町一丁目西がはにて 年來賣弘來り候処

店手ぜまに付 此度同所／向東がはへ引うつり申候間 猶相かはらす御用向
奉願上候

御免疝積湯 せんしやくつかへによし

せんきの妙薬

御用薬所 信州上田東山堂製

無るい／えりおしろいばつちり 一包／四十八銅
無るい／ながしおしろいさくら香 一包／廿四銅

大日本國郡輿地全圖 大奉書 六枚綴 府郷御江戸繪圖 同 六枚綴
御^おおし^ろい^の薬^い 取次所 地本草紙問屋 江戸南傳馬町一丁目 蔦屋吉藏

登場人物一覧（六編上）

次に『雪梅芳譚犬の草紙』六編上の登場人物名をかかけ（読み仮名・漢字とも表記は原文のまま）、その下の【】に、相当する『南総里見八犬伝』の登場人物（その他）の名を示す。

犬須賀磐作一戌【大塚番作一戌】

篠兎の父。亡君持氏【足利持氏】の宝刀村雨丸【村雨】を父大須賀正作参成から預かった。

大須賀正作参成【大塚匠作三戌】

持氏の家臣で、持氏の遺児、春王・安王の傅。磐作・瓶ざ、の父。春王・安王が、室町幕府の將軍のもとに護送される途中処刑されたので、その仇を取ろうとするが討たれた。生前、主君から預かった宝刀村雨丸を子の磐作に託していた。会話にのみ登場。

春王【春王】

持氏の子。美濃国垂井【樽井】にて弟安王【安王】とともに首を斬られた。会話にのみ登場。

左兵衛督成氏【左兵衛督成氏】

持氏の末子。管領のりた、【憲忠】を誅したため、その弟ふさあきら【房顕】に鎌倉から追い出され、下総国許我【許我】へと逃れた。会話にのみ登場。

犬須賀篠兎【大塚信乃】

磐作・明日香【手束】の子。伯母婿非義六が飼う犬よ四郎を憎んでいたので、よ四郎を守ろうと策を講ずるが、結局失敗し、よ四郎は非義六に瀕死の重傷を負わされた。

沼田助【糠助】

大須賀村【大塚村】の百姓。よ四郎が鎌倉殿からの御教書を破いたという非義六の嘘を信じ、村雨丸を非義六に渡すように磐作を説得する。

や、山非義六【彌々山墓六】

武蔵国豊島の郡【豊島郡】大須賀村の村長。瓶ざ、に入り婿して大須賀姓を継いだ。飼う猫のき次郎を咬み殺したよ四郎を、仇として恨んでいた。よ四郎が、鎌倉殿の御教書を破いたと言いたて、宝刀村雨丸を磐作から奪おうと、瓶ざ、と共に画策する。

瓶ざ、【龜篠】

磐作の腹違いの姉で非義六の妻。村雨丸を磐作から奪おうと、夫と共に画策する。

岳藏【額藏】

非義六の丁稚。十三歳。後の大河莊（壮）助【犬川莊助（介）】。五編上の挿絵の書入れには、「夢藏」とある。

よ四郎【與四郎】

磐作の飼う犬。非義六から重傷を負わされるも、磐作の家に帰り着いた。

き次郎【紀二郎】

非義六・瓶ざ、の飼う猫。よ四郎に咬み殺された。